

ラジオNIKKEI ■放送 毎週木曜日 21:00~21:15

# マルホ皮膚科セミナー

2015年2月12日放送

「第38回日本小児皮膚科学会① 大会を終えて」

東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科  
教授 向井 秀樹

## はじめに

平成26年7月5日の土曜日と6日の日曜日に、東京渋谷にあるセルリアンタワー東急ホテルにおいて、第38回日本小児皮膚科学会学術大会を当院小児科教授の関根孝司副会頭とともに開催させていただきました。渋谷は新宿、池袋、品川といった都心の中心街であります。今まで皮膚科関連の大きな学会が開催されることはなかったと思います。あいにく5日の土曜日は小雨がぱら

つきましたが、会期中の2日間で約700名近い参加者が全国からお集まりいただき、日本小児皮膚科学会学術大会を無事成功裏に終了することが出来ました。参加いただいた会員の先生方をはじめ、各講演やシンポジウムの講師、そして座長の先生方、小児皮膚科学会の評議員および学会運営事務局の皆様、そして北里大学および東邦大学同門会の先生方のご尽力に、会頭として厚く御礼を申し上げます。

The 38th Annual Meeting of The Japanese Society of Pediatric Dermatology  
第38回 日本小児皮膚科学会学術大会  
2014年7月5日(土)・6日(日)  
会場 セルリアンタワー東急ホテル  
小児皮膚科学の総括・将来の展望 (明日への展開)  
会長 向井 秀樹 (東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科)  
副会頭 関根 孝司 (東邦大学医療センター大橋病院 小児科)  
事務局長 福田 英嗣 (東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科)  
実行委員長 新山 史朗 (東邦大学医療センター大橋病院 皮膚科)  
藤原 暎子 (東邦大学医療センター大橋病院 小児科)  
平成26年7月5・6日

## 本学術大会のテーマ

現在の小児皮膚科学領域において、最も研究が進み数多くのトピックスを発信している分野や最新の疾患に対する新しい考え方などに関して、各分野のエキスパートをお招きいたしました。現在までの流れや考え方をしっかりと説明していただき、現状を総括するとともに、将来の展望や指針までも導き出すことで、次世代に繋げようと企画いたしました。したがって、本学術大会のテーマは“小児皮膚科学の総括・将来の展望 明日への展開”とさせていただきます。



第1会場 会頭開会挨拶

## 招聘講演と特別企画

招聘講演の1は北里大学名誉教授の西山茂夫先生に“小児の口腔粘膜疾患”についてご講演をいただきました。西山先生の臨床医として卓越した皮膚科医の眼力（めぢから）は、聴衆に大いなる感動を与えます。口腔内病変の多彩さに加えて、口腔内を詳細に観察することで罹患している全身疾患の存在を疑い、検査することによって基盤となっている全身疾患の診断に大いに役立ちます。多くの臨床例をみることで明らかな口腔粘膜疾患の見方を教えていただきました。口腔粘膜疾患はいろいろな情報を提供してくれます。しっかりと診察することで明日からの日常診療に役立つものと考えています。



第1会場 招聘講演 北里大学名誉教授 西山茂夫先生

招聘講演の2としましては、名古屋大学皮膚科教授の秋山真志先生に、新しいトピックスによって疾患の発症原因の一部が解明され、今後の展開が楽しみな“アレルギー疾患におけるフィラグリン遺伝子変異と皮膚バリア機能障害”という演題名でご講演をいただきました。現在、アトピー性皮膚炎や先天性魚鱗癬の発症にフィラグリン遺伝子変異が大きく関与していることが報告され、その重要性が認識されるようになってきました。フィラグリン遺伝子変異により角層のバリア機能の低下が生じると、乳児期のアトピー性皮膚炎がよくなってきても小児期になるとアレルギー性の鼻炎やアレルギー性の喘息に移行するといった、いわゆる“アレルギーマーチ”が起きます。以前、小麦分解成分配合の石鹸を使用することによって、小麦アレルギーの患者が発生しました。バリア機能が障害されている皮膚はアレ

ルゲンによる経皮感作が生じやすく、これがもとで経口的に摂取する食物アレルギーが誘発されるという驚くべき事態を経験しています。今後どのように展開するのか、遺伝子治療を含めて興味深い講演でした。

特別企画としましては、海鳥研究者としてご高名な東邦大学理学部動物生態学教室名誉教授である長谷川博先生をお招きして“絶滅危惧種アホウドリの保全”という演題名で現在までの活動状況を講演していただきました。伊豆諸島の最南端に位置する鳥島に棲むアホウドリは、羽毛採取の乱獲により 1949 年に絶滅したとされました。その後の調査で約 10 羽の生存が確認されて以来、アホウドリの習性を研究し絶滅の危機から救った第一人者の苦勞と努力の物語です。30 数年間のひたむきな努力とその活動状況には頭が下がります。新しい棲みかを人工的に作り、幾つかの工夫のすえ定着させたときの喜びと一緒に感じた貴重なご講演でした。

### シンポジウムとセミナー

シンポジウムとしては、「小児のアレルギー疾患の問題点と今後の展望」、「小児の遺伝性疾患の現況と今後の展開」、「小児の血管炎の総括と展望」、「最近話題のウイルス性疾患」、「学校保健と皮膚疾患－保育園・学校生活におけるアレルギー対策－」の5つを取り上げました。本会を構成する皮膚科や小児科以外の耳鼻科、病理診断部、臨床遺伝学センター、国立感染症研究所など多方面からの先生方をお呼びして、シンポジウムの醍醐味や内容の幅を広げることが出来ました。いずれも素晴らしい講演でしたので、明日からの診療に役立つものだと思います。

ランチョンセミナー、スイーツセミナー、イブニングセミナー、モーニングセミナーを9つ用意しました。内容が重ならないように配慮して、アトピー性皮膚炎の睡眠障害と積極的治療、乾癬治療、光線治療、皮膚感染症、食物アレルギー、皮膚科のトリビア、ニキビ、接触皮膚炎といった具合に、対象疾患が多岐にわたり興味深い内容になりました。どちらの会場に行こうかと悩まれた先生方は少なくなかったと思います。第一と第二会場、そして企業展示・ポスターの3つの会場は、同じフロアでセッティングいたしました。移動が大変便利であったという嬉しい評価をいただきました。今回、会頭の権限を行使してさらにスポンサーセミナーを企画しました。「明日の皮膚科学」をテーマに、今後さらなる飛躍が期待される京都大学椛島健治准教授には、“4Dイメージングが拓く皮膚免疫・アレルギーの新基軸”という演題名でお話していただきました。二光子励起顕微鏡下で皮膚の真皮の中で実際に起こっているアレルギー反応が目視下で見られます。皮膚免疫担当細胞のリアルタイムな動きと役割の検証は目を見張るものがあります。北里大学の天羽康之教授には、“髪の毛からはじまる未来の再生医療”と題して、毛包幹細胞が毛包や表皮ばかりか神経、血管、立毛筋の再生といった修復基地として働いているという発見をお聞きしました。将来的には再生医療の臨床応用に向けて、大いに期待の持てる分野であり素晴らしい内容の講演でした。

一般演題は口演とポスター合わせて52演題集まりました。いろいろな疾患に関する症例報告が主体ですが、小児皮膚疾患ではその発症に関与する遺伝子解析が進んでおり、そのようなデータが報告されています。この遺伝子解析によって、確定診断ばかりでなく、分類や予後などに大きく影響を及ぼしています。さらに、臨床研究や最近問題になっている話題など、最新の情報が数多く報告されました。運営委員による投票の結果、会長賞は慶應義塾大学皮膚科の本田先生、優秀賞は国立成育医療研究センター皮膚科の吉田先生、日本医科大学小児科の五十嵐先生、東京都立小児総合医療センター皮膚科の定平先生の3名の先生方が受賞されました。



ポスター会場 討論風景

### おわりに

本学術大会で行われた活発な討論と積極的な情報交換が、これからの小児皮膚科学の発展に寄与し、全国からご参加いただいた会員および諸先生方にとって、明日からの診療に多少なりともお役に立てたのであれば幸いです。

この学会を通して、小児皮膚科学分野が今後益々発展していくことを願っております。なお、次回の学術大会は7月の18日、19日に鹿児島で行われますことを申し添えて、最後のご挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございました。



懇親会会場



学術大会事務局 集合写真  
副会頭の関根孝司先生(前列左から三人目)